内海に沿って広がったそこは、潮風が路地の隅まで撫で抜けるような、そんな街であった。
尾道というその駅に降り立った殉は、車椅子を押しながら辺りの気配を感じてみた。

すぐ側に港。潮の匂いが濃い。
寂れた駅前の反対側は、なだらかな傾斜の山間に民家や寺の類が点在している。

「尾道城。昔、瀬戸内を根城にしていた海賊があそこに城を建てて、自分達の縄張りに睨みをきかせていたんだって。海賊と言っても、領主が土地を束ねたように、海が自分達の領土だったのよ」

勾配を増してそびえ立つ山の手の頂上に見える小さな城を見上げながら加夏子が言った。

「へぇ〜、物知りなんだね、カナは」

殉の呟きを聞いた加夏子がクスリと小さく笑った。

「え？　ぼく何か変なこと言った？」
「ウゥン、そうじゃないの。そうじゃないんだけど」

少しずつ笑いが大きくなるのを抑えようとしながら殉を覗き込む。

「キスの効き目、あり過ぎかなぁ〜て」
「？？？」
「だってジュンったら、『物知りなんだね、カナは』なんて言うんだもん。ナンカもうすっかり俺の女、みたいじゃない」
「え…だ…だって君が言ったんじゃないか、『カナって呼べ』って。ボ、ぼくはだから…」

抑えきれなくなった加夏子が大笑いし始めた。

ひとしきり笑った加夏子は、まだヒクヒク引きつりながら優しい声を発した。

「いいの、とっても新鮮。ケンちゃんだってワタシを呼び捨てにした事なかったし」
「ケンちゃんって…病院に来てた大学生くらいの人？」
「そう。幼なじみなんだ。好きだった…昔」

虚を突かれて殉が黙り込む。

「あこがれ、だったのかなぁ。何時も側に居てくれるカッコいい幼なじみ。恋してると思っちゃうよね普通」

港からの潮風に髪をなびかせながら、加夏子は呆々と島影を眺めていた。

「違うの。人を好きになるって、すぐそばの誰かと当たり前みたいにくっつく事なんかじゃない。出会って、戦って、判り合って。それでやっとスタート地点。それをワタシに教えてくれたのは貴方よ、ジュン」
「カナ…」

向かい合う二人に、漁師姿の男が近付いてきた。

◇

色褪せたウィンドブレーカーの襟元に下げたタオルで汗を拭いながら、ニコニコと愛想良く話しかけてきたのは初老の男だった。
くたびれた長靴が乾いた路面に足音を吸い込ませている。

「観光ですかの、車椅子じゃあ難儀じゃろうに」
「…こんにちは」

怪訝そうな顔で、それでも礼儀正しく挨拶をした加夏子をジロジロと眺め回した男は、顔を上げて今度は殉の方を向いた。

「目が見えんのかい、こっちも難儀じゃの」
「…ハァ…」

殉は殉で、毒気を抜かれたような声で返答する。
勿論、それだけではなかった。

「おじいさんは漁師？」
「ホウホウ、こりゃまた勘のいい子じゃな。判るんけ？」
「聞こえるんです。ザバァ～ンザバァ～ンて波の音。ヒュンヒュンいってるのは潮風…船で鳴ってる風の音なのかな？」

殉は男の『心の音』を聴いていた。

「ホウホウ、これはこれは…」

初老の男は嬉しそうに目を細めた。
幾条も刻まれた皺の中に目が埋まってしまったようになる。

「めしいたモンには時々、わしらにゃあ見えぬもの、聞こえぬものを感じる奴がいるが、あんたもそうなんかのう。珍しい事もあるもんじゃて、この間はこんな小さな子じゃったが」

男の最後の言葉に、二人は同時に反応した。

「小さい子！？」
「ちいさな子ですって！？」
「オヤ、どうした。顔色が変わりましたぞ」

初老の男が少し驚いたように言った。

「僕たち人を捜しにきたんです。小学生くらいの女の子…もしかして見かけたんじゃないですか？　知ってたら教えて下さい！」

殉は声のする方へ両手を伸ばした。空を切る。
男の身長は150cmもなかった。

思いもかけず力強い手が殉の両手をガッシリと捉えた。
ゆっくりと痩せて枯れた肩に置かれる。

「随分と深刻そうじゃの。ワシでいいなら手伝っちゃるけん。あのチビちゃんを捜しとるのか？」
「あの子は…碧ちゃんは病院から連れていかれたんです、早く探し出さないと！　おじいさん、知ってる事があるなら教えて下さい！！」
「あの子は私の妹みたいなものなんです、御願いします！！」

加夏子も殉と一緒になって男へ向かい頭を下げた。
男が照れくさそうに首筋を掻いた。

◇

何年ぶりだろう
ここに立ち、眼下に広がる海の、終わりの果てを目で追うのは

いつも、いつまでもそうしていた
彼と二人、他愛もない言葉を交わしながら飽く事を知らなかった
いつまでも続くと思っていた幸せな日々…

小石に躓くように簡単に、それは終わった

あの時から、私の旅は始まった
あての無い、取り戻せるかも判らないものを探す旅が

私が見つけたものは、この旅の終わりを見せてくれるのかしら
求めていた答えを指し示してくれるのかしら
本当に…本当に…

緩い風がふわりと髪を巻き上げる。
彼女は瞬きもせず、ただただ遠くへと視線を彷徨わせていた。

「…さ…ん…おじょうさ〜ん…」

高台の後ろ、下へと通じる細い小道の向こうから彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「だれ？　ツネさん？」
「へぃ。そちらにおいでで」

海に背を向け林を睨む彼女の前へ、幾らもかからぬうちに白い割烹着姿の男が現れた。

「やっぱりココでやしたか。この坂ぁ、そろそろあっしにゃキツくなってきましたな」
「ツネさん、どうしたの？　そろそろ調理場も忙しいんじゃない」
「へぇ、まあそうなんですが。何やらね、捜してるんですよ、お嬢さんを」
「捜してる？　誰が？」
「少し前に男が来たんで。東京から来たって言ってました。おかみさんが応対してましたが…こんなモン置いてきましたぜ」

割烹着姿の男は小さな紙片を渡してきた。

「やたら図体のガッチリした、ブルドックみたいな顔した奴や。探偵だとかぬかしてたが、ありゃあどう見ても悪人の面だぁ」

紙片を見た。
何の飾りも無い白い紙に、三行だけ。

　　Ｋ＆Ｍ探偵社

北山　謙二
03-xxxx-xxxx

「この人、もう帰った？」
「へぇ。『暫くこっちにいる事になりそうだから、安い宿があったら紹介してくれ』なんてぬかしやがった。ウチぁ旅館ですぜ！　おかみさんも御立腹でしょうに」

彼女…衣笠恵美子は黙って名刺を視線を落としていた。

「おじょうさん、東京で何かあったんけ？　あっしでよけりゃあ相談に…」
「何もないわ。教えてくれて有り難う、もう戻っていいから」

にべもなく答え、恵美子はまた海の見える方へと歩きだした。

急がなきゃ

細く白い指の間で、名刺がクシャクシャに握り潰された。